

叙勲



顕著な功績を挙げた人などに贈られる春の叙勲と、警察官など危険な業務に長年従事した人に贈られる危険業務従事者叙勲の受章者が発表されました。今回は荣誉に輝いた10人を紹介します。受章おめでとうございました。

旭日双光章
(地方自治功労)
相原 正明さん(70)
江刺愛宕字橋本



県職員として32年間勤務の後、平成15年から江刺市長を、18年から1期4年初代奥州市長を務め、新市では副県都構想のもと旧5市町村の均衡ある発展に尽力されました。

旭日单光章
(中小企業振興功労)
千田 伏二夫さん(72)
前沢白山字反畑



昭和54年創業、58年に会社を設立。半導体製造装置部品や航空機・自動車関連部品などを手掛けました。「夢に向かって挑戦し続けたい」と語っています。

瑞宝单光章
(統計調査功労)
佐藤 静男さん(86)
前沢字屋敷



昭和42年の県農林業統計調査から従事し、国勢調査や農林業センサスなど計68回の統計調査に尽力。「正しい統計情報の取得を心掛けてきた」と語っています。

瑞宝双光章
(海上保安功労)
豊川 治さん(65)
江刺愛宕字林



昭和49年に海上保安官となり、灯台設備の保守整備、無線通信など船舶の安全航行援助業務に従事されました。今年3月までの44年間、海の安全確保に尽力されました。

瑞宝单光章
(消防功労)
桐田 昭一さん(79)
江刺梁川字四ツ畠



昭和42年に江刺市消防団に入団し、平成13年から15年まで副団長を務められました。消防水利の確保と火災予防活動を重視し、地域の防災活動に尽力されました。

瑞宝双光章
(消防功労)
小野 進さん(67)
胆沢若柳字荒谷



東京消防庁を経て、昭和47年から胆沢地区消防組合職員となり、水沢消防署副署長、同署長を歴任。「住民に頼られる消防署」を目指し消防活動に尽力されました。

旭日双光章
(地方自治功労)
飯森 繁さん(75)
江刺岩谷堂字高蒲沢



昭和50年から4期16年、江刺市議会議員を務められました。人の役に立ちたいとの思いから、工業団地への企業誘致や、53年の宮城県沖地震からの復興などに尽力されました。

瑞宝双光章
(看護業務功労)
青木 美津子さん(76)
水沢秋葉町



昭和38年の県立胆沢病院勤務に始まり、平成14年の退職まで看護業務に従事。6病院で看護師長を歴任し、現在も病院ボランティアで活動するなど、看護に携わっています。

瑞宝单光章
(消防功労)
千葉 榮治さん(79)
水沢秋葉町



昭和40年に水沢市消防団に入団し、平成9年から13年まで副団長を務められました。責任感を持ちつつ団としてまとまることを第一とし、消防活動に尽力されました。

瑞宝单光章
(警察功労)
馬場 昭三さん(71)
江刺岩谷堂字二本木



警察官として42年間の在職期間のうち38年6カ月を地域部門で過ごしました。駐在所勤務では住民の立場に立った職務執行を心掛け、地域の治安維持に尽力されました。

We support the

希望の ひかり

ILC(国際リニアコライダー)計画の各種最新情報をお届けします

ILC東北マスタープラン

3月に、東北ILC準備室(室長・鈴木厚人県立大学長)が「ILC東北マスタープラン(概要版)」を公表しました。東北の将来像やインフラ整備に関する官民の役割分担などをまとめた基本計画です。東北ILC準備室では、この計画を政府や経済団体に示し、ILC実現の要望に活用していく予定です。同プランは、東北ILC推進協議会のホームページに掲載されています。ILCプロジェクトに関し



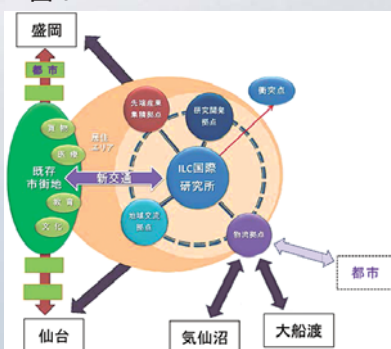
ては、本年度が実現に向け極めて重要な年です。市ではこれまで、政府の日本誘致を後押しするため、建設候補地としての熱意を伝えるとともに、東北ILC推進協議会など関係機関とも密接に連携し、研究施設や海外の研究者などの受け入れ環境づくりの準備を進めてきました。今後も引き続きILCの受入準備を着実に進めていきます。

メインキャンパスは

「奥州市」または「一関市」

マスタープランでは、ILC国際研究所のメインキャンパスは、研究の効率性と既存市街地との近接性から、本市または一関市と想定されています。ILCの多様な効果を最大限発揮できるよう、北は盛岡市から、南は仙台市まで

■図1



の各都市がコアゾーンと位置付けられ、このコアゾーン内にILC国際研究所、研究開発拠点、居住エリア、世界からの情報が集まる地域交流拠点などの拠点が設置され、相互に連携していくという姿が紹介されています(図1)。

■図2



データ解析拠点が形成される、というものです(図2)。

東北の段階的な発展 「国際拠点形成へ」

研究に必要な施設の整備は公共で、それ以外は積極的に民間を活用していくことも示されています。

ILC計画は、大型の国際プロジェクトであり、段階的な発展フェーズ(局面)が設定されています。まず、ILC政府決定後から人・モノが集積し始め、成熟期である2040年代には、ILC関連産業の国際拠点が形成されると想定されています。特にILC国際研究所周辺には、住宅、ホテル、観光、通訳、教育、医療、人材派遣などさまざまな業種の拠点が形成される構想です。

■マスタープランにおける東北の段階的な発展

発展フェース	時期(想定)	整備・発展内容
①準備期 (政府決定からおおむね4年)	2020年代前半	〔研究所受入準備〕⇒人・モノが集積 ○インフラ(道路など)整備 ○住居など外国人生活環境整備
②建設期 (着工からおおむね9年)	2020年代～ 2030年代	〔建設工事〕⇒人・モノが集積 ○建設資材供給、保管場提供 ○技術者などのための住居提供
③運用期 (運用からおおむね10年)	2030年代～ 2040年代	〔産業化〕⇒東北から世界へ情報発信 ○インキュベーション(起業支援)機能整備 ○産業団地整備、支援機能強化
④成熟期 (運用からおおむね20年)	2040年代～ 2050年代	〔イノベーション創出〕⇒国際拠点が形成 ○新技術の創出、新産業が勃興 ○ベンチャー企業が続々登場

■マスタープランにおけるILC整備に係る役割分担のイメージ

事業主体	整備施設
公共	ILC本体施設、メインキャンパス(研究オフィス、管理オフィス、コントロールセンターなど)、宿泊施設(外国人向け集合住宅、ゲストハウスなど)
民間	メインキャンパス(レセプション施設、展示施設、保育施設、娯楽施設、カフェテリア、ユーザーズオフィスなど)、商業施設、マンション、アパート、ホテルなど